

文化庁月報

No.437
2005年

2月号

CONTENTS

文化人の本音 河合隼雄文化庁長官対談 第35回 ゲスト ドナルド・リチャーさん ●映画史家

日本映画とともに歩んで	4
長官コラム 文化庁の抜穴	9

いさいきミュージアム 美術館・博物館事業レポート ⑤	22
大阪府立弥生文化博物館(大阪府)	22
芸術文化の活動風景 ①	23
武田陽一(ピアノ調律師)	23
そうかこうすればいいんだ! 著作権教育実践事例 ①	24
ITを活用した授業のための著作権教育	24
文化交流使の活動報告 ①	25
笑福亭鶴笑(落語家)	25
伝建地区を見守る人々 伝建歳時記 ①	26
城下町のおひなさん(岐阜県恵那市岩村町)	26
遺跡を楽しむ ①	28
みんなでつくる「みんなの遺跡公園」	28
文化庁の地域文化振興施策 ①	29
事例紹介 本物の舞台芸術体験事業	29
国語研究の最先端 ①	30
新しい日本語学習環境の整備	30
風を呼ぼう、わが町に 登録文化財との歩み ①	31
「思い出ふれあい事業」の展開 高齢者ケアと文化財の活用	31
文化力ニュース from 関西 関西元氣文化圏の特色ある取組 ①	32
広がる・つながるミュージアムの輪	32
国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法—文化財鑑賞の手引き— ②	33
仏画(仏教絵画)の線描	33
日本の伝統美と技を守る人々 選定保存技術保存団体編 ⑤	34
左官(日本壁)(全国文化財壁技術保存会)	34
心豊かで魅力ある社会を目指した「文化力」の向上	35
平成17年度文化庁予算の概要	35
平成16年春秋叙勲受章者の決定	36
「地域文化で日本を元気にしよう!」	36
文化審議会文化政策部会報告書公表	38
東京国立博物館	39
特別公開 中宮寺 国宝 菩薩半跏像	39
京都国立博物館	40
特集陳列 宸翰—文字に込めた想い—	40
子ども向け講座第三回少年少女博物館くらぶ	40
ロダンを写そう	40
奈良国立博物館	41
曙光の時代—ドイツで開催した日本考古展—	41
東京国立近代美術館 工芸館	42
所蔵品展示 近代工芸の百年	42
京都国立近代美術館	43
村上華岳展	43
国立西洋美術館	44
ジョルジュ・ド・ラ・トゥール展—光と闇の世界—	44

今月の
表紙

第2回国際文化フォーラム
討論「文化の多様性」鼎談

文化庁文化大使事業について	21
文化庁国際文化フォーラム報告	17
事例紹介	16
複眼的思考による発信戦略を	15
音楽の国際文化交流について思う	14
東大寺フォーラム	12
文化交流の「包含語法」と「排除語法」	10
有識者提言	10
今後の国際文化交流の課題 国際文化フォーラムの開催を通じて	10
文化庁提言	10

特集 日本文化の総合的な発信機能の強化

新国立劇場スポットライト	45
3月の国立劇場	46
芸術文化振興基金ニュース	47
題字デザイン 桑山弥三郎	

日本映画とともに歩んで



映画との出会い

河合 何がきっかけで子どものころから映画がお好きになったんですか。

リチー アメリカにいた頃から、親が私を黙らせておくために（笑）、映画館によく行っていました。

映画というのはある種現実をすぐく反映したもので、アメリカ社会を学ぶために映画を活用していました。終戦後来日することになって、そのときに日本の映画を観はじめました。当時は、進駐軍として日本の文化に触れていくことは禁止されていたために、日本で映画を観ることは非常に難しい状況にありましたが、そこに忍び込んでいくような形で観はじめたのです。

河合 忍び込んでいたでいてよかったですね（笑）。そのようにして映画を観られ

た際に印象に残っているのはどんなものですか。

リチー まず最初に覚えているのは、浅草には憲兵がいなかったということがあって、よく映画を観に行っただけです。地

下鉄も乗ってはいけなと言われてましたけど、それを無視して、地下鉄で行きました。

当時、日本のことも、日本語も何も知らない状況で、映画館の前にある看板の絵をみて、これはどういうものかというのを想像していたんです。一番最初に見た記憶に残っている絵は、トニー谷です。

河合 そのころは、日本語はまだおわかりにならなかったんじゃないかと思うんですが、理解できたんですか。

リチー 日本語はまったく知りませんでした。進駐軍では、日本語を学ぶということも禁止していたわけです。何も知らない状態で、色んなもので学んで吸収していきました。

河合 そのときに決まりを破って、日本人の中に入って一人映画館に行くことに危険を感じられなかったですか。

リチー もし憲兵にみつかったらたぶん危険だったと思いますけど（笑）、日本人の側から何か危険があるというわけはなかったですね。

河合 しかし、それだけの信頼感をもつ

て日本の中に入っていけたというのは、すごい勇気があると思います。当時のことを私は知っていますからね。

リチー 当時、人々が楽しめる唯一の娯楽というのは映画だったので、映画館の中はいつも満員でした。ですから、その経験の中では、一回も座る席をみつけたことがありませんでした。いつも映画館の後ろで人にぎゅうぎゅうもまれながら映画を観るということで、日本人は非常に近く感じられ、スキンシップみたいなものでした。

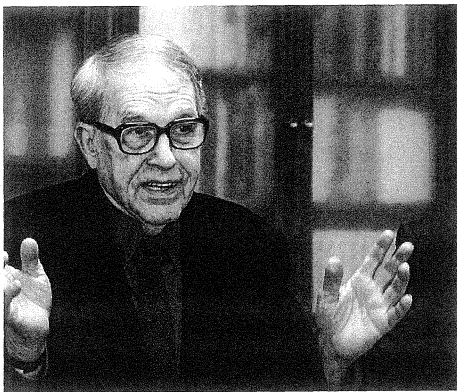
河合 そういう中から、小津安二郎とか、黒澤明というのを見出していかれたわけですが、何かきっかけのようなものはあったんでしょうか。

リチー 当時、小津とか、黒澤はまるでわからなかったんです。人々が話しているのを聞いたり、人と話していく内にだんだんわかってきたわけです。

河合 先生は、個人映画作家として作品をつくったり、脚本をお書きになったりされておりますが。

リチー 私が六〇年代に映画を作ったこ

Donald Richie 米国オハイオ州生まれ。
1946年12月、第二次大戦占領軍の一員として来日し、そのまま日本に定住。47年から軍の新聞「星条旗」に映画評論を寄稿。以後、「ジャパン・タイムズ」「ニューヨーク・タイムズ」「ワシントン・ポスト」など多くの紙面をとおして日本映画を海外に紹介する。おもな著書に『小津安二郎の美学—映画のなかの日本』『黒澤明の世界』など多数。映画作家として『熱海ブルース』『犠牲』など30本以上の作品を製作している。



にみんなうんざりしていました。その中で、小津の映画が、映画の時間の流れとか、調子とか、そういったものを理解し、楽しむ機会を与えてくれたと思います。

河合 今また日本の、例えば北野武監督が出てきたり、渡辺謙さんが『ラストサムライ』に出たりしていますが、現代の日本の映画とかつての黒澤、小津のころの映画と比べて、どんなふうに感じてらっしゃいますか。

リチー 確かに状況は違うと言えますが、小津、黒澤のころも、現代も、娯楽映画と芸術的に追求する映画の二つがあると思います。例えば、娯楽映画の中では、北野武なんかが入っていて、昔で言えば『ゴジラ』の映画の系譜に入ると思います。

一方、芸術的に追求している映画の分野では、どんどん新しい作家が生まれていますけれども、是枝裕和のような監督が、いわゆる小津、黒澤の流れにいます人だと思っています。娯楽映画と芸術的な映画の割合というのは、常に一定であったて変わるものではないと思います。

日本映画の海外普及

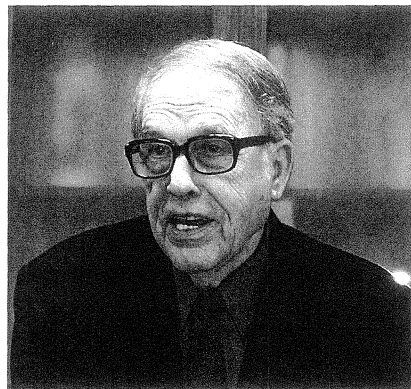
現在は状況が変わってきて、個人の映画製作にお金がかかり過ぎるということがあると思いますが、個人映画の伝統というのはいまだにあると思います。

河合 リチーさんのおかげで、その後日本の映画が海外に紹介されていくんですが、そのころ、もちろん海外の人は日本の映画を全然知らない。その状況で日本の映画を紹介していく苦労もあった中で、印象的なことはありましたか。

リチー たくさんあります。例えば一九五〇年代後半に初めて小津安二郎の本を買ってそれをきっかけにベルリン映画祭で小津の特集をやるということ、私が仲介を担ったんです。松竹に行つて、「小津安二郎の特集をやりたい」と言いまし

たら、松竹の方々は「だめだ」と言うんです。何でかという、小津はあまりにも日本的過ぎるので、外国の人はわからないだろうとおっしゃられた。だから、私は彼に向かって「小津安二郎というのは国際的な作家である。あなたのおっしゃっていることは違う。非常に日本的であるからこそ国際的にも受け入れられるんだ」と言ったんです。実際何とかフィルムを借りて上映したんですけど、非常に成功しました。

今、ニューヨークで小津安二郎の映画



の特集をやったりすると、人々が列をなして並んでいて、非常に人気があります。必ずしも埋まるし、完全に受け入れられていますね。逆に海外で作品を観る機会が、日本でよりも多いんじゃないかと思うくらいです。

河合 私は、もちろん小津が大好きで、一九六五年ぐらいにスイスにいたんですが、そのときにアメリカ人の友人を招待して、スイスで上映していた小津の作品を観に行つたんです。その友人が、終わった後で、「なぜこれが終わりがわからない。どう考えても終わりにならない」「いや、日本人にとってはこれは終わりです」というので、その映画の説明をしたらようやく理解してもらったという調子でした。やはりリチー先生のいろんな解説があったから、みんなわかったと思うんです。

リチー 小津の映画というのは、海外の観客にとつての教育的な機会だったと思います。それまでアメリカ映画というのは、すごく暴力的な、例えば撃ち合つたりとかする作品が多く、そういったもの



近年の韓国映画の隆盛

河合 今、韓国の映画が随分盛んになってきています。先生は釜山国際映画祭で審査委員長もされたようですが、韓国あるいは日本の「韓流ブーム」をどうお考えですか。

リチー 私は韓国が大好きなので、この現象については、非常にうれしく思っています。ただ、なぜこんなに人気があるのか、正直わからないところがあります。みんな、『冬のソナタ』が原因だと言つて

いますけども、それだけではないと思います。現在、若い人が中心になつていて、お互いの文化を発見するという状況にあると思うんです。

今まで日本映画は、当然、韓国では上映していなかったわけだし、韓国映画は日本で上映しても人が観に来ないという状況があったと思います。そのような中で、今回文化庁がやられたようなイベントは、すごくいいことだと思います。これらを通じた若い世代の互いの文化の発見が一つ理由だとは思いますが。

河合 これは私も非常にすばらしいことだと思っています。

ジャパノロジスト(日本学者)から見た日本文化

河合 先生は映画だけではなくて、狂言も観られますし、日本の文化全体をよくご存じですね。ちよつと映画を離れまして、日本の文化に対するご関心とか、それから日本の文化をどんなふうに見ておられますか。また、どんな点が魅力だと思われれますか。

リチー 狂言は実際シナリオを書いたこともあります。能もよく観に行きますけれども、特に田舎の文化が好きで、田舎のお祭りとか、神楽とか、御興とか、そういういたものにも興味があります。私は常に両サイド、端のものが好きで、中心にあるような文化、歌舞伎なんかよりも外側の文化のほうに興味をもちがちです。河合 私も好きなんです、神楽とか、祭りというのは、祭りのスピリット、神楽のスピリットをまだ残していると思います。

リチー そういったスピリットというのは神社だけではなくて、日本の他の地域にも思っていると思います。

河合 日本文化に対する先生の感じは非常によくわかります。

リチー 同じ波長をもっていますね。

今後の日本映画の在り方は

河合 たくさんの日本映画を紹介されて、リチーさんをグランパとして、たくさんの研究者がいて、その人たちがまた伝えてくださっているという現状があります

ね。

リチー 私の弟子もたくさんいて、その弟子たちも本を書いて、先生になったりしています。現在、アメリカのある程度の大きな大学でしたら、日本映画についてのコースが必ずある状況です。

私は実際、先月もニューヨークのバード大学で、日本映画を教える人たちの教育するというをやってきました。東京にあるテンブル大学でも日本映画を教えていますし、日本映画教育に対するニーズはすごく高いです。実際、日本国内よりも、むしろ海外の方が高いのではないかと思います。

河合 そうです。日本の大学は、映画ということに関しては非常に遅れています。つい最近、東京芸術大学に映画のコースができました。

リチー 製作に関してはいろんな学校ができてきていると思います。特に商業的な部分を教えるということもあるんですが、ただ、日本映画の歴史的な部分、あるいは本質的な部分を研究するという意味では非常に少ない状況だと思っています。

河合 最近、日本国内でも映画に対する関心が変わってきましたし、日本の映画作品も良くなってきたと思っっているんですが。

リチー 日本映画は、今、国内外ですごく注目されている状況にあると思います。海外では、日本映画のルネサンスなのではないかという言い方もあるくらいで、日本の国内でも活発になってきているのではないかと思います。また、三池崇史とか、北野武といったところの作品、あるいは漫画とか、アニメも映画ですけれども、そういったものについての本も出てきています。

日本の映画で問題があるとしたら、海外の人たちが観にくい状況にあるということ、特に商業的な路線に乗っていない作品、例えば古典映画でクオリティの高いものは非常に観づらい状況にあるのではないかと思います。

河合 これは日本としては真剣に考えるべきですね。文化庁だけじゃなくて、他省庁も一緒になって。

これからの日本映画について、今、国

際交流が非常に盛んですが、そういう点ではどういうことを期待されますか。

リチー 未来については専門でないんですけども、さっきも言いましたが、芸術的な映画と娯楽的な映画が日本には常にあったわけで、その割合が同じような形でいくことが望ましいんだと思います。例えば、漫画とか、アニメが完全に勝利してしまうと、文学がだめになってしまふのではないかと思うんです。そういう意味で、若い人たちが映画について新し

い作品を創っていくことが望まれますし、自分たちの生活を通じた表現を追いかけていくことが大切だと思います。

河合 「東京フィルメックス」という映画祭でも審査委員長を務められています、日本国内の映画祭などについて、こうしたらいいということはあるでしょうか。

リチー 「東京フィルメックス」は、日本が一番いい映画祭だと思っています。大衆性とか、お金をもうけるとか、スタ

ーシステムとか、そういうところとまったく関係ない作品で、映画のことを真剣に取り上げています。他に言うならば、山形国際ドキュメンタリー映画祭とか、湯布院映画祭などは、スターとか、パーティといった映画とは関係ないところに注目している映画祭と違って、非常にいい映画祭だと思います。

河合 今日は大変ありがとうございます。またこれからもよろしく願っています。(丁)

あらたな気持ちで

文化庁の抜穴 河合隼雄

ちで臨むことが必要だと思う。

三年の任期が終わり、これで放免されると思っていたが、長官の仕事が続けることになった。就任以来「文化で、日本を元気に」という標語のもとに頑張ってきた、だいぶ効果が見えてうれしく思っていた。それをもう一押しせよ、というわけである。

こんなときに、三年間うまくやってきたので、この調子で続けてやろうと安易に考えていると、必ず失敗するものだ。過去のことは忘れて、一から出発し直すほどの気持

自分の決意をあらたにし、それを文化庁の皆様にもともしていただこうと、文化庁の職員全員とパーティを開いた。パーティは実に楽しかったが、ここで文化庁の全員があらたな気持ちをもって、「文化で、日本を元気に」しようと心をひきしめたことは、大きな意義があったと思う。このような気持ちで努力しますので、皆様方もどうぞよろしく願います。

◆ 長官対談 ◆

【文化人の本音】 河合隼雄文化庁長官対談
中川志郎（財）日本博物館協会
【長官コラム】文化庁の振興

◆ 特集 ◆

史跡等の保存と活用

【施策紹介】

史跡等の整備・保存と活用のために

【事例紹介】

甦る神々のみち／熊野古道伊勢路

普及活用事業

庭園ボランティアの育成

天然記念物の保護が地域を興す

◆ 文化庁ニュース ◆

文化庁企画「お雛煮一〇〇選」

平成一六年度（第八回）

文化庁メディア芸術祭賞の決定 ほか

◆ 連載 ◆

【いきいきミュージアム／美術館・博物館事業レポート】
高松市歴史資料館

【芸術文化の活動風景】
鳳の制作風景

【そうかこうすばいいんだ！著作権教育実践事例】
著作権を大切にする社会を目指して

【文化交流使の活動報告】
画家・ローチャン・田理子

【伝建地区を見守る人々／伝建蔵時記】
高山（巻）岐阜県

【遺跡を築く】
戦争を語りつぐ遺跡「南風原陸軍病院壕群」

【文化庁の地域文化振興施策】
平成一七年度の地域文化振興施策

【国語研究の最先端】
「外来語言い換え提案」

【風を呼ぼう、わが町に―登録文化財との歩み―】
首都東京からの文化の発信 出会い・交流・文化財

【文化力ニュース】関西 関西元氣文化圏の取組

【国宝・重要文化財をもっと楽しむ方法】
第一 回京部のさくら市民の集い

【日本の伝統美と技を守る人々】
歌舞伎大道具・背景画製作 歌舞伎大道具・背景画製作技術継承会

歌舞伎大道具・背景画製作 歌舞伎大道具・背景画製作技術継承会

文化庁月報 2月号（通巻437）

平成17年2月25日印刷・発行

編集——文化庁

〒100-8959 東京都千代田区丸の内2-5-1

発行——株式会社 ぎょうせい

本社 〒104-0061 東京都中央区銀座7-4-12
本部 〒167-8088 東京都杉並区荻窪4-30-18
電話 編集 03 (3571) 2126
販売 03 (5349) 6666
URL : http://www.gyosei.co.jp

印刷所—ぎょうせいデジタル株式会社

●本誌の掲載のうち、意見にわたる部分については、筆者個人の見解であることをお断りいたします。

定価540円 本体514円 送料76円
年間購読料6,480円

本誌のご購読のお申し込みは、直接弊社の本・支社、あるいは最寄りの書店へお申し込みください。

広告の問い合わせ・申し込み先

（株）ぎょうせい営業部広告課
電話03 (5349) 6657（ダイヤルイン）
©2005 Printed in Japan ISSN 0916-9849

本誌は本文用紙に再生紙を使用しております。

編集後記

「文化の多様性」は、現在、ユネスコにおいても文化多様性条約の策定の議論がなされているほか、さまざまな国際会議でテーマとなっている、非常に重要な問題であると考えています。

イラク、アフガニスタンの紛争や、二〇〇一年九月一日の同時多発テロなど、民族、宗教などの違いを背景にもつ対立が激化している現在において、文化の相互理解、対話が大きな意味をもつことでしょう。

今年の「国際文化フォーラム」では、イラクの文化人をはじめ、世界各国から、さまざまなジャンルの文化人・芸術家に参加いただき、活発な議論がなされました。今回の特集では、座談会の座長、司会をお願いした先生方に寄稿をいただいたほか、「国際文化フォーラム」の議論の内容を紹介しました。

今後、世界の各地で、文化の相互理解が進み、人々の生活が豊かで平和なものへとなることを願っています。（際）

文化庁では、ホームページで、文化庁に関する情報を幅広く提供しています。ご意見、文化庁月報の感想などを、ホームページのご意見欄へお寄せください。

●ホームページアドレス●

http://www.bunka.go.jp